

しいむじな

2024・冬

87

特集

病と祈り



八千代市内で撮影した「アマビエ石碑」。その出現を伝えた江戸時代の瓦版に描かれた姿が忠実に表現されている。(2024年11月撮影)

房総のフィールド・ミュージアムとは

房総を舞台に、地域の自然や文化そのものを「資料」や「展示物」ととらえる、千葉県立中央博物館によるフィールド事業（野外で展開する博物館活動）の一環です。観察会を開催したり、君津市立清和小学校の校舎を利用した「教室博物館」を拠点に、地域の方々のご協力のもと、資料の収集や調査・研究等の活動を行っています。

この写真は八千代市萱田の長福寺境内で撮影したものです。石碑に彫られている図像に見覚えのある方も多いのではないのでしょうか。

江戸後期、肥後国に出現したと伝えられる疫病封じの妖怪で、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行に関連してインターネット上のミームとなった「アマビエ」の姿が表現されています。背面を確認すると建立されたのは令和三年三月とのこと。

アマビエはSNSの普及などといった近年の社会情勢を背景として爆発的に「バズ」り、感染症対策のアイコンとなりました。コロナ禍という社会現象を象徴する存在ともいえるでしょう。

八千代市の近辺には、この「アマビエ石碑」だけでなく、人々の病氣平癒への祈りを込めた石造物が多く残されています。（小出麻友美）

特集

病と祈り



写真①：当館歴史展示室にて展示中の「木造薬師如来坐像（複製）」。現品は銚子市常灯寺蔵（重要文化財）。年に一度、正月八日に公開される。
 写真②：八千代市米本城跡の「しろぬし様」。(2024年11月撮影)
 写真③：佐倉市白井田の「おたつ様」。お茶やお菓子が供えられていることが確認できる。(2024年12月撮影)

丸が跡を継ぐこととなりました。しかし、竹若丸がまだ三歳と幼少であったため、祐胤の弟の志津城主胤氏が後見することとなりました。胤氏ははじめ遺言を守っていましたが、次第に野心が芽生え、竹若丸を殺害してなり代わろうと考えるようになりつきます。この謀反に気がついたのがおたつという下女でした。彼女がいち早く岩戸城主五郎胤安に知らせたことで、竹若丸は逃げおおせることができま

した。おたつ自身は胤氏に殺されてしまうのですが、「しろぬし様」と同じく「隠れていたところ咳をしてしまったため発見されてしまった」という理由付けがなされています。「咳のために命を落とした」という説話を伴う咳の神様は、千葉県内に限らず全国各地に多く分布していると言われており、こうした点も興味深いところでは。おたつを気の毒に思った里の人が彼女を弔うために建立したという石碑が佐倉市白井田に祀られています。『利根川図志』によると、「咳の出る人が祠に焦椒（麦で作られた落雁のようなお菓子）とお茶を供えて祈ると不思議に治る」とのこと。現地を訪ねてみると碑にはペトトポトルのお茶や麦のお菓子が数多く供えられており、中には最近お供えされた様子のももみられました（写真③）。「おたつ様」への信仰は、今なお地域にしっかりと息づいているようです。

（小出麻友美）

【参考文献】

- 紺野敏文「総論 房総の神と仏」造像の展開を中心に」（千葉市美術館編『房総の神と仏』一九九九年）
- 濱名徳順「房総の薬師如来像とその信仰」（千葉市美術館編『仏像半島房総の美しき仏たち』二〇一三年）
- 八千代市中世館址調査団『八千代市中世館址調査報告』八千代市教育委員会、一九七六年
- 八千代市史編さん委員会『八千代市の歴史 通史編』八千代市、二〇〇八年

昔も今も、「健康」が大きな関心事であることに変わりはないでしょう。しかし、高度な医療技術が発達していなかった近現代には、神仏を初めとする超自然的存在に祈らざるを得ないことがしばしばありました。

房総半島にまで仏教文化が波及したのは7世紀ごろと考えられており、発掘調査の成果によって、最古級の寺院として龍角寺（現印旛郡栄町）と上総大寺（現木更津市、現在は廃絶）の二寺があったことが明らかとなりました。この両寺は薬師如来を本尊としていたと言われてい

ます。龍角寺には現在も御本尊として銅造薬師如来坐像（重要文化財）が鎮座しており、東京都調布市の深大寺が所蔵する銅造釈迦如来倚像（重要文化財）と並ぶ関東最古の白鳳仏として有名です。龍角寺以外にも県内には古い薬師如来像の優品が数多く残されており、病を癒してくれる薬師如来が人々の尊崇をあつめていたことがうかがえます（写真①）。

一方、表紙でもご紹介した八千代市を中心とする地域には不思議に咳を治してくれるという民間信仰「咳の神様」にまつわる言い伝えや石碑が多くみられます。たとえば、八千代市米本にある中世城郭・米本城跡には「しろぬし様」と呼ばれる神様があり、水の神様である「あんぼさま」（茨城県稲敷市の大杉神社）と並んで祀られています。これは永祿元年（一五五八）頃、城が落城した際に咳をしてし

まったことで敵に発見され、殺されてしまった老兵の墓であると伝えられています。墓石とされているのは板碑と呼ばれる石製塔婆を転用したもので、康永三年（一三四四）の年紀が確認されます。つまり、伝承の老兵の墓石であることはあり得ないのですが

（写真②）、米本が中世前期から地域にとつて重要な意味を持つ場所であったことを示唆する遺物であるといえるでしょう。一方、八千代市に隣接する佐倉市に伝わる「おたつ様」の伝承については、江戸末期の医師赤松宗旦が著した地誌『利根川図志』巻四に詳しく記されています。正和三年（二二二四）、白井城主白井祐胤が病死したため、子息竹若丸が跡を継ぐこととな

り、おたつを弔うために建立したという石碑が佐倉市白井田に祀られています。『利根川図志』によると、「咳の出る人が祠に焦椒（麦で作られた落雁のようなお菓子）とお茶を供えて祈ると不思議に治る」とのこと。現地を訪ねてみると碑にはペトトポトルのお茶や麦のお菓子が数多く供えられており、中には最近お供えされた様子のももみられました（写真③）。「おたつ様」への信仰は、今なお地域にしっかりと息づいているようです。

（小出麻友美）

コラム

房総の動植物 (7)

冬もバッタ観察

冬は多くの昆虫にとって厳しい季節です。一般的に昆虫の仲間は土の中に潜ったり、朽木の中に隠れたりして、寒さを耐え凌ぎます。そのため、冬はあまり昆虫を観察することができませんが、千葉県では、冬でも比較的簡単に成虫を観察できるバッタの仲間があります。それが今回紹介するツチイナゴ *Patanga japonica* (図①)。バッタといえば、秋。そのようなイメージから少し外れたユニークなライフサイクルの持ち主です。

ツチイナゴの特徴

ツチイナゴはオスが体長50-55mm、メスが50-70mmの大型のバッタで、日本国内では北海道を除く全国に広く分布し、国外では朝鮮半島、中国、台湾、インドに分布しています。成虫は褐色ですが、若虫の多くは緑色です(図②)。本種は大型でありながら個体数も多いため、見たことがあるという方もいるかもしれません。一見、トノサマバッタやクルマバッタなどの他のバッタと見間違えやすいですが、目の下の黒い涙のような模様が特徴で、房総半島ではこのような模様を持つバッタはツチイナゴだけです(図①)。クズなどの幅が広い葉を好んで食べるため、それらが茂る環境を好みますが、イネ科草本を食べることもあり、他のバッタ類と比較すると食へのこだわりは少ないようです(図③)。

ユニークなライフサイクル

多くのバッタ類は、秋に地中に卵を産み、産みつけられた卵はそのまま冬を越し、春に孵化しますが、ツチイナゴは冬に観察することが難しいのですが、ツチイナゴは成虫のまま冬を越し、春に産卵します。図④にツチイナゴと一般的なバッタ類のライフサイクルを示しました。産卵の時期が半年ほどずれていることがわかると思います。このライフサイクルを持つバッタの仲間は千葉県ではツチイナゴただ1種のみです。

ツチイナゴの卵は初夏に孵化します。産まれたばかりの若虫は緑色で、全身に黒い斑点があります(図⑤)。たくさんの葉を食べ、脱皮を重ねて、秋になると成虫になり、そのまま越冬します。冬場の成虫は枯れ草の下でじっとしていることが多いですが、暖かい日には日向ぼっこをしていることもあります(図⑥)。本種に特徴的な目の下の黒い模様は生まれてすぐにはなく、脱皮を重ねると現れるようになります(図⑦)。

ちなみに南西諸島には本種に近縁で、より大型のタイワンツチイナゴ *Patanga succinata* が生息しています(図⑧)。奄美大島や沖縄に行った際は探してみてください。

千葉県で冬に観察できる「バッタの仲間」はツチイナゴだけですが、実は冬に成虫を観察できる「昆虫」はツチイナゴ以外にも

います。今年の冬は昆虫を観察して、例年とは違う充実した冬にしてみませんか？
(樽宗一朗)

※若虫…不完全変態(蛹にならない)の昆虫に用いる幼虫のこと。バッタの仲間の他、カマキリやトンボの仲間にも当てはまる。



	春	夏	秋	冬
ツチイナゴ	成虫 → 卵	若虫	成虫	
一般的なバッタ類	卵	若虫	成虫	卵



図① ツチイナゴ成虫 (2021年4月18日 生態園で撮影：目印は目の下の黒い涙のような模様)
 図② ツチイナゴ若虫 (2020年9月3日 生態園で撮影：かわいい)
 図③ ツチイナゴ成虫 (2023年10月19日 生態園で撮影：ススキを食べている)
 図④ ツチイナゴと一般的なバッタ類のライフサイクルの比較
 図⑤ ツチイナゴ若虫 (2017年7月21日 君津市立三島小学校で撮影：まだ目の下に黒い模様はない)
 図⑥ ツチイナゴ成虫 (2020年11月14日 生態園で撮影：暖かそう)
 図⑦ ツチイナゴ若虫 (2024年9月4日 生態園で撮影：目の下に黒い模様がある)
 図⑧ タイワンツチイナゴ成虫 (2018年6月18日 奄美大島で撮影：よく見るとツチイナゴより体表面の毛が少ない)

観察会報告 秋の里の生きもの

10月20日(日)、君津市宿原の三島神社周辺で観察会「秋の里の生きもの」を開催しました(参加者23名)。観察会前日は雨が降り、気温も下がってしまいましたが、観察会当日は雨も降らず気温も上がりました。この日盛り上がりを見せたのがフクラスズメの幼虫(写真①)。毒々しい見た目と、激しい体の動きから注目を集めていました。

(樽宗一朗)



写真① フクラスズメの幼虫

連載

小櫃川流域の生きもの ムラサキツバメ ～集団で越冬?～

ピーヨ、ピーヨと小鳥の鳴き声、今年も北国からヒヨドリが渡ってきたか?と思いながら、散歩に出かけた。こげ茶色の小さなチョウが近所の庭木の色づいたミカンの実に舞い降りた。後ろ翅(はね)に突起がある。「あ!ムラサキツバメ」。この時期、このチョウは越冬場所を探して移動する。急いで、カメラを取りに行き戻ってきたが、もういなかった。近くの公園のマテバシイの若葉が、このチョウの幼虫に食べられた痕が残っていたから、そこにいるのでは?と考え、行ってみると予想通り若葉に1匹止まっていた。

実は、かつて、2~3匹のムラサキツバメが、陽のあたる、畑地を囲むシイ・カシ林の樹上を飛び回り、背丈の高さのスダジイの葉上に降りてくるのを観察していた。近づいて、よく見ると数匹が重なり合って止まっている。この場所は、樹の葉や枝で被われ、風雨雪が当たらない場所である。「集団越冬?」と思った。しかし、不思議なことに、集団が形成されるのは12月中旬~下旬で、1月初旬には集団はなくなり、別の場所で個々に飛行している。なぜ、冬になると一時的に集団になるのか?いまだに、不

思議に思っている。

さて、南国に生息していたムラサキツバメは、房総では1986年にはじめて館山市で発見された。その後、2002年には県下全域に分布するようになった。理由は暖冬になったことと幼虫のえさのマテバシイが公園や垣根にもともと植えてあったからである。

現在は、近所では、マテバシイの垣根は少なくなったが、公園や農家には残っているので、このチョウが毎年発生し、モンシロチョウなどよりも頻繁に出会う。春~秋には翅を開く姿はまず見られないが、冬になると陽だまりで、このチョウのメスがゆっくりと翅を広げると目の覚めるような青色が現れる。一度みたら、このチョウの美しさに魅了されてしまう。

参考文献

- ・成田篤彦、2006、木更津市中尾におけるムラサキツバメの集団越冬について、千葉生物誌56巻2号 pp.68-69
- ・白水隆著、2006、『日本産蝶類標準図鑑』学研

(文・写真 千葉県立中央博物館ボランティア 成田篤彦)



写真① ムラサキツバメのメス 2013年12月14日 木更津市
写真② ムラサキツバメの集団越冬? 2006年12月23日 木更津市

MEMO ムラサキツバメ チョウ目シジミチョウ科

- 全長21~31mm。本州、四国、九州、台湾、スマトラなどに分布。成虫で越冬し、5月~6月に産卵、その後、連続して発生を繰り返す。

しいむじなの由来



房総のフィールド・ミュージアムのニュースレターのタイトル「しいむじな」は、アナグマをさす房総丘陵の方言です。ムジナは地域によってアナグマやタヌキをさすなど様々なのですが、千葉県内ではアナグマのことが多いようです。房総丘陵の人々は、大きなスダジイの木のウロに棲んでいるムジナを、愛情を込めて「しいむじな」と呼んでいます。

(樽宗一朗)

今回は、信仰とツチイナゴの話題をお届けしました。「アマビエ」は知っていましたが、「おたつ様」や「しろぬし様」は知りませんでした。咳にまつわる神様は、どのくらい種類があるのでしょうか。非常に気になります。冬の昆虫観察は非常に面白いのでオススメです。暖かい時期であるとながら動いてしまう昆虫も、寒い冬はほとんど動かないためじっくり観察できます。

編集後記